

Nuclear Weapon & Nuclear Test Monitor

核兵器・核実験モニター

582

19/12/15

毎月2回1日、15日発行
1996年4月23日
第三種郵便物認可

軍事力によらない安全保障体制の構築をめざして

¥200



長崎の原爆落下中心地碑への献花のため、花輪を手に被爆者である下平作江さんらとともに歩む教皇フランシスコ。(2019年11月24日、長崎市爆心地公園。写真:パチカン教皇庁HPより)

主筆■梅林宏道
編集長■湯浅一郎

発行■NPO 法人ピースデポ
〒223-0062
横浜市港北区
日吉本町 1-30-27-4 1F

Tel 045-563-5101
Fax 045-563-9907
e-mail: office@peacedepot.org
http://www.peacedepot.org
f https://www.facebook.com/peacedepot.org/

郵便振替口座■
00250-1-41182
特定非営利活動法人 ピースデポ
銀行口座■
横浜銀行 日吉支店
普通 1561710
特定非営利活動法人 ピースデポ

ローマ教皇の訪日

「核兵器の保有は、 それ自体が倫理に反しています」 —相互尊重のみが平和を創る

2019年11月23日～26日、第266代ローマ教皇フランシスコ¹が訪日し、長崎、広島、東京の各所で平和への思いを込めたスピーチを行った。パチカン市国は、核兵器禁止条約の成立に貢献し、いち早く批准するなど、核軍縮へ大きな役割を果たしてきた。教皇フランシスコは、教皇として初めて核兵器の保有そのものを否定した教皇である。その歴史も考える。

核兵器禁止条約とパチカン

パチカン市国は、17年7月7日にニューヨーク国連本部で開催された最後の交渉会議において核兵器禁止条約(TPNW)が採択されたとき賛成

票を投じた。同年9月20日にTPNWが署名開放された。その日に署名したのは50か国であったが、署名および批准の両方をした国は3か国あった。パチカン市国はそのうちの1か国である(他はガイアナとタイ)。

今号の
内容の

ローマ教皇と核兵器<資料1>長崎・爆心地公園でのスピーチ<資料2>広島・平和記念公園でのスピーチ/ロシアの新型核兵器運搬システム/[連載]全体を生きる(23)
「ミサイル防衛の愚行を止められない」梅林宏道



編集長 湯浅一郎

モニター休刊に寄せて

既に会報などでお知らせしましたが、『核兵器・核実験モニター』は本号をもって一旦休刊とします。ピースデポは、発足から21年目に入り、世代交代を積極的に進めねばならない時期を迎えており、その解決に向けて来年度から事業を抜本的に見直し、若手中心に展開する計画を立てました。タイムリーに課題を選び、正確さを期し充実した質を保持して『モニター』を刊行し続けるには相当な力量が必要ですが、昨今さまざまな機会に力不足を認識する場面に直面してきたことも否めません。

1995年7月からほぼ隔週で出してきた本誌は実に582号に達しました。ほぼ四半世紀にわたり核兵器廃絶と脱軍備による安全保障体制の構築をめざして情報発信を続けてきたことになります。その一部を集めて別冊としました（同封）。

多くの成果がありますが、世界の非核兵器地帯、地球上の核弾頭全データ、NPT再検討会議の合意文書、国連総会での核軍縮決議などの定点観測は、毎年、アップデートしてきました。情報公開法で得た米艦船の航海日誌の分析から、対テロ特措法に基き自衛隊が米艦船に提供した燃料がイラク戦争に転用されていたことを実証した事例は国会で大きな論争を生み出しました。核兵器廃絶と脱軍備に向け、地道だが確かな役割を果たしてきたと思いま

す。

今、核兵器の存在そのものを否定する核兵器禁止条約が採択され、発効へ向け国際的努力が行われています。朝鮮半島の平和と非核化が当該国の首脳間で正面から検討される画期的なチャンスが到来しています。一方で、現在も9か国が総計1万4千発の核兵器を保有し、核兵器国は、核戦力を近代化し、新型核兵器の開発に邁進しています。未だ核兵器廃絶への道のりは見えていません。

核廃絶や脱軍備という観点からの取り組みを必要とする状況は、依然として存在しています。その限りにおいて、「一次資料に基づく正確な情報、わかりやすい分析を重視した活動」を通じて「平和問題のシンクタンク」をめざすピースデポのスタンスは変わることなく継続されねばなりません。

モニターは休刊となりますが、来年度からは年6回の新メディア『脱軍備・平和レポート』を発行します。編集長にピースデポ研究員の森山拓也が就任し、若い世代の創意と感性を編集に生かすことになります。

長きにわたる『モニター』ご愛読に感謝するとともに、今後は、新メディア『脱軍備・平和レポート』へのお力添えを心からお願いいたします。

17年11月10日～11日、TPNW採択から約3か月後に、バチカン市国は「核兵器のない世界と統合的軍縮への展望」をテーマに、国際シンポジウムを主催した。同シンポジウムには、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）の和田征子事務局長などNGO代表、中満泉国連事務次長・軍縮担当上級代表ら国連関係者、諸外国の外交代表、研究者、諸宗教関係者らが参加した²。TPNW採択後、初めての大型核軍縮国際会議であった³。

シンポジウムで教皇フランシスコはTPNWの意義を強調し、とりわけその条約が「人道インシャティブ」によって実現したことの意義を強調した。そして、核兵器の使用が「人道及び環境への壊滅的な影響」をもたらすと述べた後に、「何らかの過誤によって偶発的な爆発が起こることを考えると、使用の威嚇はもちろん、保有そのものが強く非難されなければならない」と述べた⁴。このようにフランシスコ教皇は、核兵器の使用、威嚇、保有を明確に否定することによって、核抑止論を否定した。

教皇：核抑止肯定から否定へ

教皇フランシスコは、2013年に教皇になったが、核抑止論を明確に否定した初めてのローマ教皇であった。

バチカン市国は核時代に入って以来、核兵器に一貫して反対してきたと言ってよい。広島、長崎への原爆投下のできごとを知った当時の教皇ピウス12世は、戦争がやむを得ない場合においても、核兵器の使用が許される場面はないと考えた⁵。しかし、核兵器のバランスによって核戦争が防止されるという冷戦時代の核抑止論について、ローマ教皇は苦しい選択を強いられてきた。

教皇ヨハネ・パウロ2世は厳しい冷戦下の1981年に初めて広島、長崎を訪問した教皇として知られている。当時の核軍備競争に強い危機感を抱き、その克服を願った。訪日の翌年、第2回国連軍縮総会（ニューヨーク）が開催されたが、そのとき教皇ヨハネ・パウロ2世は次のように抑止論を容認する演説をした⁶。

「今日の状況において、バランスに基づく『抑止』は、むしろそれ自身が目的ではなく段階的軍縮への一段階であるとして、道徳的に許容できるかもしれない。とはいえ、この最低限のことはい

新しいぶどう酒は新しい革袋に

主筆 梅林宏道



今号をもって『核兵器・核実験モニター』は休刊することになりました。

率直な気持ちとしては、とても残念です。そして、読者に申し訳ない気持ちになります。

機会があるたびに書いてきたことですが、『モニター』は1995年4-5月にニューヨークで開かれたNPT再検討・延長会議を契機に始まりました。世界から集まったNGOがネットワーク「アボリション2000」を結成し、それまでの核凍結・削減運動を乗り越えて世界的な核兵器廃絶運動が始まりました。その熱気を引き継ぐ形で、私は帰国直後、7月15日に『モニター』を創刊しました。

残念ながら、その核兵器廃絶運動はまだ道半ばです。それどころか新しい難所に直面しています。NPTとの関係でいうと、来年2020年に重要な再検討会議があります。せめてそれを総括して『モニター』の区切りとするという考えも浮かびます。しかし、諸般の事情からこのタイミングとなりました。

とはいえ、結果的には休刊は正しい選択であると確信しています。

何よりも、「新しいぶどう酒は新しい革袋に」という教えがあります。改めてこの聖書の言葉の文脈を勉強したのですが、私流の理解ではこの言葉は今私

たちにふさわしい意味合いをもっています。この一節の前に「新しい布切れで、古い衣服の継ぎ当てをするものはいない」という言葉もあります。この布切れの比喻もぶどう酒の比喻も、古いものと新しいものの両方を尊重しています。どちらかのためにどちらかを犠牲にするという考えに立っていません。そのうえで新しいものに光を当てた活かし方を語っています。新しいぶどう酒はまだ発酵を続けていて、古い革袋を破る勢いがあります。そうなると大切な古い革袋が破れてしまいます。そうしてはならない。新しいぶどう酒はそれにふさわしい革袋が必要だ、ということです。

『モニター』では原典を参照しないで原稿を書く、という主義でやってきました。最近ではせめてトップ原稿だけはそうしようと考え、人の原稿に手を加えてきました。しかし、新しいぶどう酒と新しい革袋がそろいました。しばらく古い革袋をそのままにして、ぶどうの発酵を待つことにしよう、ということになりました。

第100号記念特集（1999年10月1日）、創刊10周年記念特集（2005年7月15日）、創刊500号記念特集（2016年9月15日）に、多くの方々から励ましの言葉を頂いてきました。改めて深く感謝いたします。

つも爆発の現実的な危険を伴っているものであり、平和を確かなものにするためには、この最低限に満足しないことが不可欠である。」

この冷戦時代の核抑止論という制約と決別したのが教皇フランシスコである。米国におけるオバマ大統領の登場と関係があったと推測できる。2015年9月の国連総会で、教皇フランシスコはすでに次のように核抑止論を鋭く批判した⁷。TPNW成立前のことである。

「相互破壊—実際には人類破壊—の恐怖に基づく倫理と法とは自己矛盾であり、国連の枠組み全体への侮辱である。国連は恐怖と不信の連合に陥ってしまうであろう。」

広島・長崎での演説

教皇フランシスコは2019年11月23日～26日に広島、長崎、東京を訪れた。ローマ教皇の来日は、1981年の第264代教皇ヨハネ・パウロ2世以来、2回目となる。今回の教皇来日のテーマは、「すべてのいのちを守るため～PROTECT ALL LIFE」であった⁸。

教皇は、11月24日に長崎の爆心地公園と、広島

の平和記念公園でスピーチを行った。長崎でのスピーチ(4ページ資料1に全文)では、「国際的な平和と安定は、相互破壊への不安や壊滅の脅威を土台とした、どんな企てとも相いれないものです」と核抑止の考えを否定し、「(平和と安定は)人類家族が共有する相互尊重と奉仕への協力と連帯という、世界的な倫理によってのみ実現可能となります」と説いた。そして、軍事費について「軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。本来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使われるべきものです」と述べた。

広島でのスピーチ(5ページ資料2に全文)では、核のない世界についてより強いメッセージを発信した。教皇は原子力の戦争目的の使用について「犯罪以外の何ものでもない」「倫理に反する」と非難した。さらに、「核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています」と2017年の言葉を広島でも繰り返した。軍拡と平和の両方を語る現状については「戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことがどうしてできるでしょうか」「紛争の正当な解決策として、核戦争の脅威による威嚇をちらつ

かせながら、どうして平和を提案できるでしょう
か」と厳しい問いを投げかけた。

11月25日、安倍晋三首相は教皇フランシスコ
と面談して次のように語った⁹。

「日本とは、唯一の戦争被爆国として、『核兵器
のない世界』の実現に向け、国際社会の取組を主
導していく使命をもつ国です。これは、私の揺る
ぎない信念、日本政府の確固たる方針でありま
す。」

人の心と向き合うことを仕事にしている人物
に対して、何と無神経に心にもないことを言える
首相だろうか。(平井夏苗、梅林宏道) 

注

1 原音は「フランチェスコ」であるとの指摘がある
が、カトリック中央協議会にしたがって「フラン
シスコ」と書く。

2 パチカン放送局HP「パチカンで核兵器廃絶と軍縮
をめぐる国際シンポジウム」(2017年11月10日)
<http://www.radiovaticana.va/japanese/japindex.html>

3 同上

4 パチカン教皇庁HP「国際シンポジウム『核兵器の
ない世界と統合的な軍縮に向けての展望』の参加

者に対する教皇フランシスコの演説」(2017年11月
10日)。

[http://www.vatican.va/content/francesco/en/
speeches/2017/november/documents/papa-
francesco_20171110_convegno-disarmointegrale.
html](http://www.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2017/november/documents/papa-francesco_20171110_convegno-disarmointegrale.html)

5 アaron・ベイトマン「冷戦から現在までのパ
チカンの核外交」(2019年11月6日) [https://
warontherocks.com/2019/12/the-vaticans-
nuclear-diplomacy-from-the-cold-war-to-the-
present/](https://warontherocks.com/2019/12/the-vaticans-nuclear-diplomacy-from-the-cold-war-to-the-present/)

6 教皇ヨハネ・パウロ2世「国連総会へのメッセージ」
(1982年6月7日)

[https://w2.vatican.va/content/john-paul-ii/en/
messages/pont_messages/1982/documents/hf_jp-
ii_mes_19820607_disarmo-onu.html](https://w2.vatican.va/content/john-paul-ii/en/messages/pont_messages/1982/documents/hf_jp-ii_mes_19820607_disarmo-onu.html)

7 教皇フランシスコ「国連総会における教皇の演説」
(2015年9月25日)

[http://w2.vatican.va/content/francesco/en/
speeches/2015/september/documents/papa-
francesco_20150925_onu-visita.html](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2015/september/documents/papa-francesco_20150925_onu-visita.html)

8 カトリック中央協議会「教皇訪日特設サイト」
<https://popeinjapan2019.jp/>

9 安倍晋三「ローマ教皇フランシスコ台下との会談
等」

[https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/
actions/201911/25vatican.html](https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/201911/25vatican.html)

<資料1>ローマ教皇のスピーチ 核兵器についてのメッセージ

長崎・爆心地公園
2019年11月24日

愛する兄弟姉妹の皆さん。

この場所は、わたしたち人間が過ちを犯しうる存在
であるということを、悲しみと恐れとともに意識させ
てくれます。近年、浦上教会で見いだされた被爆十字
架とマリア像は、被爆なさったかたとそのご家族が生
身の身体に受けられた筆舌に尽くしがたい苦しみを、
あらためて思い起こさせてくれます。

人の心にあるもっとも深い望みの一つは、平和と安
定への望みです。核兵器や大量破壊兵器を所有するこ
とは、この望みに対する最良のこたえではありません
。それどころか、この望みをたえず試みにさらすこ
とになるのです。わたしたちの世界は、手に負えない
分裂の中にあります。それは、恐怖と相互不信を土台
とした偽りの確かさの上に平和と安全を築き、確かな
ものにしようという解決策です。人と人の関係をむし
ばみ、相互の対話を阻んでしまうものです。

国際的な平和と安定は、相互破壊への不安や壊滅の
脅威を土台とした、どんな企てとも相いれないもので
す。むしろ、現在と未来のすべての人類家族が共有す
る相互尊重と奉仕への協力と連帯という、世界的な倫
理によってのみ実現可能となります。

ここは、核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末
をもたらすことの証人である町です。そして、軍備拡
張競争に反対する声は、小さくともつねに上がってい
ます。軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。本
来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使わ

れるべきものです。今日の世界では、何百万という子
どもや家族が、人間以下の生活を強いられています。
しかし、武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、
築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっていま
す。これらは神に齒向かうテロ行為です。

核兵器から解放された平和な世界。それは、あらゆる
場所で、数え切れないほどの人が熱望していること
です。この理想を実現するには、すべての人の参加が
必要です。個々人、宗教団体、市民社会、核兵器保有国
も非保有国も、軍隊も民間も、国際機関もそうです。核
兵器の脅威に対しては、一致団結して具体性をもって
応じなくてはなりません。それは、現今の世界を覆う
不信の流れを打ち壊す、困難ながらも堅固な構造を土
台とした、相互の信頼に基づくものです。1963年に聖
ヨハネ23世教皇は、回勅『地上の平和(パーチェム・イ
ン・テリス)』で核兵器の禁止を世界に訴えています
(112番[邦訳60番]参照)、そこではこう断言してもい
ます。「軍備の均衡が平和の条件であるという理解を、
真の平和は相互の信頼の上にしか構築できないとい
う原則に置き換える必要があります」(113番[邦訳61
番])。

今、拡大しつつある、相互不信の流れを壊さなくて
はなりません。相互不信によって、兵器使用を制限す
る国際的な枠組みが崩壊する危険があるのです。わた
したちは、多国間主義の衰退を目の当たりにしていま
す。それは、兵器の技術革新にあってさらに危険なこ
とです。この指摘は、相互の結びつきを特徴とする現
今の情勢から見ると的を射ていないように見えるか
もしれませんが、あらゆる国の指導者が緊急に注意を
払うだけでなく、力を注ぎ込むべき点でもあるので
す。

カトリック教会としては、人々と国家間の平和の実現に向けて不退転の決意を固めています。それは、神に対する、そしてこの地上のあらゆる人に対する責務なのです。核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際的な法的原則に則り、たゆむことなく、迅速に行動し、訴えていきます。昨年の7月、日本司教協議会は、核兵器廃絶の呼びかけを行いました。また、日本の教会では毎年8月に、平和に向けた10日間の平和旬間を行っています。どうか、祈り、一致の促進の飽くなき探求、対話への粘り強い招きが、わたしたちが信を置く「武器」でありますように。また、平和を真に保証する、正義と連帯のある世界を築く取り組みを鼓舞するものとなりますように。

核兵器のない世界が可能であり必要であるという確信をもって、政治をつかさどる指導者の皆さんにお願いします。核兵器は、今日の国際的また国家の安全保障への脅威に関してわたしたちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください。人道的および環境の観点から、核兵器の使用がもたらす壊滅的な破壊を考えなくてはなりません。核の理論によって促される、恐れ、不信、敵意の増幅を止めなければなりません。今の地球の状態から見ると、その資源がどのように使われるのかを真剣に考察することが必要です。複雑で困難な持続可能な開発のための2030アジェンダの達成、すなわち人類の全人的発展という目的を達成するためにも、真剣に考察しなくてはなりません。1964年に、すでに教皇聖パウロ6世は、防衛費の一部から世界基金を創設し、貧しい人々の援助に充てることを提案しています(「ムンバイでの報道記者へのスピーチ(1964年12月4日)」)。回勅『ポプロールム・プログレッシオ(1967年3月26日)』参照。

こういったことすべてのために、信頼関係と相互の発展とを確かなものとするための構造を作り上げ、状況に対応できる指導者たちの協力を得ることが、きわめて重要です。責務には、わたしたち皆がかかわっていますし、全員が必要とされています。今日、わたした

ちが心を痛めている何百万という人の苦しみに、無関心でいてよい人はいません。傷の痛みで叫ぶ兄弟の声に耳を塞いでよい人はどこにもいません。対話することのできない文化による破滅を前に目を閉ざしてよい人はどこにもいません。

心を改めることができるよう、また、いのちの文化、ゆるしの文化、兄弟愛の文化が勝利を収めるよう、毎日心をつにして祈ってくださるようお願いいたします。共通の目的地を目指す中で、相互の違いを認め保証する兄弟愛です。

ここにおられる皆さんの中には、カトリック信者でないかたもおられることでしょう。でも、アッシジの聖フランシスコに由来する平和を求める祈りは、私たち全員の祈りとなると確信しています。

主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。

憎しみがあるところに愛を、
いさかいがあるところにゆるしを、
疑いのあるところに信仰を、
絶望があるところに希望を、
闇に光を、
悲しみあるところに喜びをもたらすものとしてください。

記憶にとどめるこの場所、それはわたしたちをハッとさせ、無関心でいることを許さないだけでなく、神にもっと信頼を寄せるよう促してくれます。また、わたしたちが真の平和の道具となって働くよう勧めてくれています。過去と同じ過ちを犯さないためにも勧めているのです。

皆さんとご家族、そして、全国民が、繁栄と社会の和の恵みを享受できますようお祈りいたします。

出典:カトリック中央協議会
<https://www.cbccj.catholic.jp/2019/11/24/19818/>

<資料2>ローマ教皇のスピーチ 広島平和記念公園 2019年11月24日

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』(詩編122・8)。

あわれみの神、歴史の主よ、この場所から、わたしたちはあなたに目を向けます。死といのち、崩壊と再生、苦しみといつくしみの交差するこの場所から。

ここで、大勢の人が、その夢と希望が、一瞬の閃光と炎によって跡形もなく消され、影と沈黙だけが残りました。一瞬のうちに、すべてが破壊と死というブラックホールに飲み込まれました。その沈黙の淵から、亡き人々のすさまじい叫び声が、今なお聞こえてきます。さまざまな場所から集まり、それぞれの名をもち、なかには、異なる言語を話す人たちもいました。その

すべての人が、同じ運命によって、このおぞましい一瞬で結ばれたのです。その瞬間は、この国の歴史だけでなく、人類の顔に永遠に刻まれました。

この場所のすべての犠牲者を記憶にとどめます。また、あの時を生き延びたかたがたを前に、その強さと誇りに、深く敬意を表します。その後の長きにわたり、身体の激しい苦痛と、心の中の生きる力をむしばんでいく死の兆しを忍んでこられたからです。

わたしは平和の巡礼者として、この場所を訪れなければならないと感じていました。激しい暴力の犠牲となった罪のない人々を思い出し、現代社会の人々の願いと望みを胸にしつつ、じっと祈るためです。とくに、平和を望み、平和のために働き、平和のために自らを犠牲にする若者たちの願いと望みです。わたしは記憶と未来にあふれるこの場所に、貧しい人たちの叫びも携えて参りました。貧しい人々はいつの時代も、憎し

みと対立の無防備な犠牲者だからです。

わたしはつつしんで、声を発しても耳を貸してもらえない人々の声になりたいと思います。現代社会が直面する増大した緊張状態を、不安と苦悩を抱えて見つめる人々の声です。それは、人類の共生を脅かす受け入れがたい不平等と不正義、わたしたちの共通の家を世話する能力の著しい欠如、また、あたかもそれで未来の平和が保障されるかのように行われる、継続的あるいは突発的な武力行使などに対する声です。

確信をもって、あらためて申し上げます。戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています。それは、わたしがすでに2年前に述べたとおりです。これについて、わたしたちは裁きを受けることになります。次の世代の人々が、わたしたちの失態を裁き裁判官として立ち上がるでしょう。平和について話すだけで、国と国の間で何の行動も起こさなかったと。戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるのでしょうか。差別と憎悪のスピーチで、あのだれもが知る偽りの行為を正当化しておきながら、どうして平和について話せるのでしょうか。

平和は、それが真理を基盤とし、正義に従って実現し、愛によって息づき完成され、自由において形成されないのであれば、単なる「発せられることば」に過ぎなくなると確信しています。(聖ヨハネ23世回勅『パーチェム・イン・テリス——地上の平和』37〔邦訳20〕参照)。

真理と正義をもって平和を築くとは、「人間の間には、知識、徳、才能、物質的資力などの差がしばしば著しく存在する」(同上87〔同49〕)のを認めることです。ですから、自分だけの利益を求めるため、他者に何かを強いることが正当化されてよいはずはありません。その逆に、差の存在を認めることは、いっそうの責任と敬意の源となるのです。同じく政治共同体は、文化や経済成長といった面ではそれぞれ正当に差を有していても、「相互の進歩に対して」(同88〔同49〕)、すべての人の善益のために働く責務へと招かれています。

実際、より正義にかなう安全な社会を築きたいと真に望むならば、武器を手放さなければなりません。「武器を手にしたまま、愛することはできません」(聖パウロ6世「国連でのスピーチ(1965年10月4日)」10)。武力の論理に屈して対話から遠ざかってしまえば、いっそうの犠牲者と廃墟を生み出すことが分かっているながら、武力が悪夢をもたらすことを忘れてしまうのです。武力は「膨大な出費を要し、連帯を推し進める企画や有益な作業計画が滞り、民の心理を台なしにします」(同)。紛争の正当な解決策として、核戦争の脅威による威嚇をちらつかせながら、どうして平和を提案できるのでしょうか。この底知れぬ苦しみが、決して越え

てはならない一線を自覚させてくれますように。真の平和とは、非武装の平和以外にありえません。それに、「平和は単に戦争がないことでもな〔く〕、……たえず建設されるべきもの」(第二バチカン公会議『現代世界憲章』78)です。それは正義の結果であり、発展の結果、連帯の結果であり、わたしたちの共通の家の世話の結果、共通善を促進した結果生まれるものなのです。わたしたちは歴史から学ばなければなりません。

思い出し、ともに歩み、守ること。この三つは、倫理的命令です。これらは、まさにここ広島において、よりいっそう強く、より普遍的な意味をもちます。この三つには、平和となる道を切り開く力があります。したがって、現在と将来の世代が、ここで起きた出来事を忘れるようなことがあってはなりません。記憶は、より正義にかなない、いっそう兄弟愛にあふれる将来を築くための、保証であり起爆剤なのです。すべての人の良心を目覚めさせられる、広がる力のある記憶です。わけても国々の運命に対し、今、特別な役割を負っているかたがたの良心に訴えるはずです。これからの世代に向かって、言い続ける助けとなる記憶です。二度と繰り返しません、と。

だからこそわたしたちは、ともに歩むよう求められているのです。理解とゆるしのまなざしで、希望の地平を切り開き、現代の空を覆うおびただしい黒雲の中に、一条の光をもたらすのです。希望に心を開きましょう。和解と平和の道具となりましょう。それは、わたしたちが互いを大切に、運命共同体で結ばれていると知るなら、いつでも実現可能です。現代世界は、グローバル化で結ばれているだけでなく、共通の大地によっても、いつも相互に結ばれています。共通の未来を確実に安全なものとするために、責任をもって闘う偉大な人となるよう、それぞれのグループや集団が排他的利益を後回しにすることが、かつてないほど求められています。

神に向かい、すべての善意の人に向かい、一つの願いとして、原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらない！ 兵器の轟音はもういらない！ こんな苦しみはもういらない！ と。わたしたちの時代に、わたしたちのいるこの世界に、平和が来ますように。神よ、あなたは約束してくださいました。「いつくしみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」(詩編85・11-12)。

主よ、急いで来てください。破壊があふれた場所に、今とは違う歴史を描き実現する希望があふれますように。平和の君である主よ、来てください。わたしたちをあなたの平和の道具、あなたの平和を響かせるものとしてください！

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」(詩編122・8)。

出典：カトリック中央協議会
<https://www.cbj.catholic.jp/2019/11/24/19823/>

ロシアが開発する 新型核兵器運搬システム NTI が報告書を公開

11月13日、米国の研究機関、核の脅威イニシアチブ(Nuclear Threat Initiative: NTI)から、ジル・フラビー(Jill Hruby)による、プーチン大統領が発表したロシアの新型核兵器運搬システムについての初の詳細な報告書『ロシアの新型核兵器運搬システム：公開資料に基づく分析』が公開された¹。プーチン大統領は2018年3月の年次教書演説において、開発中の複数の核・ミサイル兵器を公表し、ロシアの軍事力を誇示した²。またプーチン大統領は19年2月の年次教書演説でも、新型兵器の開発が進展し、配備が間近であることを改めて強調した³。

ロシアは6つの新型核兵器運搬システムを発表しており、それらはICBM、極超音速運搬システム、新型戦略兵器運搬システム(原子力推進システム)の3種類に分類することができる。以下ではフラビーの報告書をもとに、ロシアの新型兵器について解説する。

新型 ICBM

サルマート

サルマートは液体燃料型のICBMで、後述するアバンガルドを含め、種類の異なる3～24個の核・通常弾道を同時に搭載できる。ロシアの従来のICBMは北極経路での米国攻撃を想定していたが、新素材によって軽量化されたサルマートの飛距離は16000km以上とされ、南極経路でも米国や欧州を攻撃できる。米国はこれまで北側からの攻撃を想定してミサイル防衛システム(MD)を整備してきたため、南側からの攻撃には新たな対策が必要となる。サルマートはブースト段階が短い新型エンジンを搭載し、発射の探知が困難とされるが、詳細は分かっていない。

極超音速運搬システム

極超音速運搬システムはマッハ5(時速6100km)以上の速度で飛行する。従来の弾道ミサイルも極超音速で飛行するが、新型の極超音速運搬システムは低空飛行し、決まった弾道を描かず、飛行中の操作が可能である点に特徴がある。こうした特徴により、極超音速運搬システムはミサイル防衛システムを突破することができる。

極超音速運搬システムにはICBMなどによって発射されグライダーのように滑空するタイプと、エンジンを搭載する巡航ミサイルタイプがある。極超音速兵器の使用するラムジェットエンジンはマッハ4～5の速度で動作するため、最初にロケットエンジン等で加速する必要がある。現在のラムジェットエンジンは数分しか使用で

きないため、その改良が課題である。また、極超音速での飛行は2000度以上の熱を生むため、それに耐える素材の開発や、高速移動中の通信システムの開発も必要である。

キンジャル

キンジャルは固体燃料型のミサイルで、迎撃機のミグ31から発射され、マッハ5～10の極超音速で飛行する。フィンがついており、空力で飛行中の操作が可能である。ミグ31の片道飛行距離も含めると射程は2000kmであり、通常・核両方の弾頭を搭載できる。キンジャルは敵のミサイル防衛施設や空母などの破壊を目的としており、19年に試験配備が完了している。

アバンガルド

極超音速滑空体のアバンガルドはICBMによって打ち上げられた後、上空で切り離され、マッハ20以上の速度でグライダーのように滑空する。また翼をもち、飛行中に方向を変えることができるとされる。アバンガルドは新型ICBMのサルマートにも搭載されることになっている。アバンガルドの開発は1980年代にさかのぼるとされており、2014年以降に加速した。ロシアは2018年12月にアバンガルドの発射実験に成功したとしているが、極超音速飛行に伴う高熱に耐える素材の開発や通信システムの構築が課題となっている。核兵器・通常兵器の搭載が可能で、ミサイル防衛システムや高価値ターゲットの破壊を目的としている。

ツイルコン

ツイルコンは艦船や潜水艦から発射される極超音速巡航ミサイルで、マッハ5～6の速度で飛行し、射程は500kmとされる。固体燃料ロケットで発射され、加速後にスクラムジェットエンジンで極超音速飛行する。スクラムジェットエンジンの燃焼時間の延長や、高速に耐える機体の開発が課題とされている。ツイルコンは敵の空母や、沿岸部のミサイル防衛施設、指令センターなどの攻撃を想定している。

新型戦略兵器運搬システム(原子力推進システム)

新型戦略兵器運搬システムは小型原子炉を動力として利用することで、これまでにない長距離の移動を可能とした核兵器であり、他国には存在しないシステムである。小型原子炉の開発は過去10年間に急速に進展し、ロシアは海上プラットフォーム、北極での石油採掘、そして新型兵器への小型原子炉利用を目指してきた。

19年8月にロシア北西部の軍事施設で発生した放射性物質の拡散を伴う爆発事故は、新型戦略兵器運搬システムに利用する小型原子炉の開発に関係するものと考えられている。

ポセイドン

原子力推進核魚雷のポセイドンは核弾頭を積み、時速100～200kmの速度で、既存のどの潜水艦や魚雷よりも

深い1000mの水深を進むことができる。小型原子炉を動力源とし、射程は1万kmに及ぶ。ポセイドンは潜水艦や艦船から魚雷のように発射される。ポセイドンの大きさは直径1.6m、全長24mで通常の魚雷の30倍であり、ロシアはポセイドン搭載用の潜水艦を開発している。ポセイドンは長距離の高速移動で大きなノイズを生むため探知は容易だが、深い水深を高速移動するため迎撃は困難と見られている。ポセイドンは核爆発や津波によって敵の空母や沿岸のインフラを破壊することを目的としている。

ブレベストニク

原子力推進核巡航ミサイルのブレベストニクは、核弾頭を積み、亜音速で低空を飛行する。ブレベストニクには動力として小型原子炉が搭載され、固形燃料ロケットで発射・加速後、ラムジェットエンジンが吸入する空気を原子炉が1400～1600℃に暖めることで推進力を得る。射程距離は25000kmとされ、しばしば「無限」と形容される。

原子力推進のミサイルや航空機のコンセプトは核時代の初期から各国が追及してきたが、迎撃された際や飛行中の故障による放射性物質の飛散といったリスクが高く、実現されることはなかった。ブレベストニクの実用化も困難が予想され、配備の予想時期は6種の新兵器の中で最も遅い2030年以降となっている。

ロシアが以上のような新型兵器の開発を公にするようになった意図はどこにあるのだろうか。指摘されているのは、大統領選挙を控えるプーチン大統領がロシアの強さを国民にアピールしようとした説や、米国やNATOに対してロシアの軍事技術の発展を誇示しようとした説である。

ロシアは西側諸国に配備されたMDによって自国の核兵器が無効化され、「相互確証破壊」による核抑止力が機能しなくなることを恐れてきた。新型兵器は極超音速、低空飛行、飛行中の方向操作、長大な飛行距離といった

特徴により、従来のMDを突破することを目指している。また、今年8月のINF全廃条約失効を受け、ロシアは米国による中距離核戦力の配備を懸念しており、新型兵器には米国を牽制する意図があると考えられる。

ただし、新型兵器はいずれも実用化に向けた技術的ハードルが高く、開発スケジュールは大幅に遅れている。今年4月にサルマートの工場で発生した火災や8月の核事故は、開発を急ぐロシアが安全性を犠牲にしていることを示唆する。極超音速兵器は米中も開発に取り組んでおり、軍拡競争の激化や、開発や配備中の事故リスク増大の恐れがある。

現在、米ロの核兵器数を制限する唯一の枠組みである新STARTは2021年が期限であり、米ロが新STARTの2026年までの延長に合意できるかどうか問われている。新STARTの延長は、2026年までに配備予定のサルマートとアバンガルドを制限対象に加えることを加能にする。

他方で、ポセイドンなどロシアが発表した新型兵器のいくつかは、新STARTや他の既存条約の対象にならない新たな概念の兵器であり、それらを制限する新たな枠組みの構築も必要である。極超音速兵器の開発には米中も取り組んでおり、このままでは新たな軍拡を招きかねない。国際社会は技術的に制御の難しい危険な原子力利用兵器の開発を監視し、軍拡競争を防ぐ努力をしなければならない。（森山拓也）^M

注

1 Hruby, Jill [2019] "Russia's New Nuclear Weapon Delivery Systems: An Open-Source Technical Review." (https://media.nti.org/documents/NTI-Hruby_FINAL.PDF)

2 本誌541号(18年4月1日)に関連記事。

3 本誌564号(19年3月15日)に関連記事。

＜表＞ロシアの新型核兵器運搬システム一覧

名称	タイプ	報告されている 最大速度	報告されている 最大射程	報告されている 弾頭の種類	予想されている 配備時期
サルマート	液体燃料、多弾頭のICBM	マッハ20以上	16000km	アバンガルドを含む異なる種類の核弾頭を搭載可	2022～2027年
キンジャル	極超音速空力弾道弾。イスカンデルMの改良版。	マッハ5～10	2000km（搭載航空機の片道飛距離含む）	通常・核	2019年試験配備
アバンガルド	極超音速滑空体	マッハ20以上	6000km	通常・核	2022年以降
ツイルコン	極超音速巡航ミサイル	マッハ5～6	500km	通常・核	2025～2030年
ポセイドン	原子力推進核魚雷	時速100～200km	10000km	核	2027年以降
ブレベストニク	原子力推進核巡航ミサイル	亜音速	25000km以上	核	2030年以降

※フラビーによる報告書をもとに作成。

第23回 ミサイル防衛の愚行を止められない

全体を生きる

梅林 宏道

(題字は筆者)

1990年代の後半から2000年代前半にかけて、米国のミサイル防衛計画に反対する活発な科学者の運動があった。飛んでくる鉄砲玉を鉄砲玉で打ち落とすという比喻がそのまま当てはまる、新技術による国防計画である。レーガン大統領のスターウォーズ計画が失敗したのち20年足らずして再びブームとなった。良心的な科学技術者がその専門知識から批判の声をあげた。

中心となる反対の理由は極めて簡単なものであった。どのように精巧なミサイル防衛網を張り巡らせても、それを打ち破るミサイルを開発することは簡単であり、現実の世界でミサイル防衛は役に立たないという理由である。弾道ミサイルで相手を攻撃する技術を持つ国であれば、ミサイルそのものの開発よりもはるかに容易な技術でもって相手のミサイル防衛に打ち勝って核攻撃を遂行することができる。それに要する技術の難易度は低く、それに必要な投資もミサイル防衛に注がれる投資よりもはるかに少なくて済む。もっとも分かり易い例は、おとりの開発だ。核弾頭と区別できないおとりの弾頭を多く搭載してどれが本物か分からなくすることができる。

しかし、この愚かで理不尽な計画は莫大な予算を消費しながらブッシュ（子）政権の強行突破によって既成事実化し、国家を呑み込んでいった。2007年頃だっただろうか、私は米国の反対運動の先頭にいた「憂慮する科学者同盟(UCS)」の科学者の一人に率直な質問をしたことがあった。「原理的に役に立たないという主張は今でも正しいのか。」「科学者たちの反対の声が聞かれなくなっているのはなぜか。」「それに対する答えは明快であった。「今でも主張は正しい。ミサイル防衛は役に立たない。」「声をあげても聞く人がいない。社会がそのように動くと、主張を発信し続ける資金の出所もなくなっている。」

理性的に考えると、ロシアも中国も役に立たない技術に莫大な資金を投入している米国を、嘲笑しながら高みの見物を決め込んでおれば好い。しかし、理性的ではない戦争の

機械は世界に繋がっている。米国の脅威を必要としている政治家、戦略家、軍人がロシアにも中国にもいる。必要というほどではなくても、最悪に備えるのが防衛だという理屈がある。ミサイル防衛の脅威が吹聴され、ミサイル防衛が有効であることを前提にした軍拡競争が始まった。

巨大な無駄遣いがまかり通っている。喜劇でも漫画でもなく、怒りのやり場のないような現実の世界である。飢えた人々や戦争を逃れる難民が溢れる世界を脇目にみながら、米国のミサイル防衛は巨費を浪費し、世界を不安定化し、軍備競争を引き起こしている。それが分かっているが止められない。

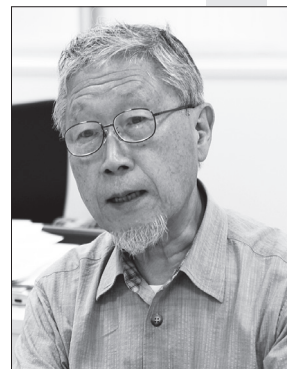
UCSの科学者の悔しい気持ちは私の気持ちでもある。日本において似た経験をする。記者にミサイル防衛に関するコメントを求められるが、「そもそもミサイル防衛は役に立たない」というコメントは、いかに科学的に説明しても記事にならない。中国やロシアの反発とか、アメリカ製品の高価な買い物とかのコメントなら使えるコメントになる。既成事実となって社会に居座り、それを前提に社会が回り始めると、その全否定は社会に通用しなくなる。

ここには民主主義社会の市民が問わなければならない、実に複雑な問題が横たわっている。明らかに常識に反することが起こっているときにも市民の中から止める力が生まれてこない。政府が巨額な投資をした大きな事業であればあるほど、それを止めることができない。惰性、習慣化、あきらめ、さらには、これによって恩恵を受ける誰かに巡り巡って自分も繋がっているかもしれないという錯誤の思考、など。社会的な集団心理として解明されなければならない問題があるだろう。

しかし、一方で権力者の明らかな愚行に慣らされていた市民が、突然の稲妻の光によって、集団催眠から覚まされることがあるのも私たちの経験は教えている。一人の人間が持っているたまたまの魔法の力と、くすぶっていた埋もれ火がつながって変化を起こす。

うめばやし ひろみち

1937年、兵庫県洲本市生まれ。ピースデポ特別顧問、本誌主筆。長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)初代センター長(2012～15年)。



日誌

2019.11.21~12.5

作成: 中村桃子、永井剛志

1月発売

イアブック「核軍縮・平和2019」 —市民と自治体のために

監修: 梅林宏道/編著: NPO法人ピースデポ
A5判 発行: 緑風出版

会員価格1600円
一般価格1900円
(ともに+送料)

【特別記事】朝鮮半島の非核化と日本/
監視報告(1~16号)/防衛大綱
トピックス: トランプ政権の核軍事戦略など
新資料29点!!

●11月21日 東電福島第一原発、汚染水処理問題について、政府「浄化できる」と在日外交官に対して説明。
●11月22日 東京電力、柏崎刈羽原発の避難扉開放できず、消防法に抵触している事を柏崎市に報告。
●11月23日 中東での国際会議で、河野太郎防衛相が自衛隊派遣の検討表明。
●11月23日 福井県高浜町が関電から43億円余りの寄付金を受け取っていたと発覚。
●11月23日 NPDIの第10回外相会合が名古屋市中で開催。来春のNPT再検討会議に向け、NPT体制を維持、強化する重要性を確認。
●11月24日 ローマ教皇が長崎と広島を訪れ、核兵器の廃絶を訴える。(本号参照)
●11月25日 菅官房長官、韓国政府が発表した、「GSOMIA維持に関する発表への日本政府の謝罪」について謝罪の事実を否定。
●11月25日 菅官房長官、ローマ教皇の核兵器廃絶の発言について、「日米安保体制の下、核抑止力を含めた米国の抑止力を維持、強化していくことは我が国の防衛にとって現実的で適切な考え方だ」と語る。
●11月26日 フランシスコ教皇、原発利用に対し、人類や地球環境への安全性が保証されるまで利用を控えるべきと発言。
●11月26日 海賊対策で派遣されている自衛隊部隊が、アフリカのジブチでの洪水被害の復旧支援を行うことが決定。
●11月26日 トルコ、ロシア製ミサイル防衛システムのレーダー試験を開始。
●11月27日 東電福島第一原発で高濃度汚染水が漏えいした可能性があるとしたが、線量には大きな変動なしと発表。
●11月27日 トルコ初の国産対空ミサイル、ボズドアンが初試験に成功。
●11月27日 原子力規制委員会、東北電力女川原発2号機の再稼働審査合格決定。
●11月28日 海上保安庁、DPRKから発射された飛翔体は日本海のEEZ外に落下と発表。これに対して安倍首相は、国際社会に対する深刻な挑戦と非難。
●11月29日 中部電力、南海トラフ地震で大規模停電・原発事故想定し防災訓練実施。
●11月30日 DPRK、新たな弾道ミサイルの発射を示唆し、安倍首相を名指しで非難。
●11月30日 長野県、台風第19号災害対応終了に伴い、自衛隊派遣の撤収を要請。

●12月1日 DPRKによるミサイル発射用の土台増設が発覚。
●12月2日 自衛隊、NATOが主催するサイバー演習に本格参加。
●12月2日 政府と東京電力、2021年から福島第一原発の燃料デブリを取り出すと発表。廃炉完了まで30~40年の見込み。
●12月3日 米国防省、飛翔体を発射したDPRKに対し、挑発を中断し交渉に復帰するよう要請。
●12月4日 KCNA、朝鮮労働党が12月下旬に中央委員会総会を開催すると発表。
●12月4日 日本政府は中東に派遣する自衛隊を270人規模とする方向で調整開始。
●12月4日 DPRKが飛翔体を発射した事を受け、欧州が安保理非公開会合開催を要請。
●12月5日 イラン、弾道ミサイル開発計画の継続を明言。英仏独の国連大使は国連事務総長宛て書簡で、イラン核合意をめぐる国連決議との矛盾を指摘。
●12月5日 米CNN、DPRKがミサイル施設でICBMに使われるエンジン試験再開を準備している可能性があるとして報道。
●12月5日 河野防衛相、イージス・アショア配備計画を巡り、住宅地との距離を「重要な考慮要素とする」方針で再調査実施中と明らかに。

沖縄

●11月22日 「沖縄県軍用地転用促進・基地問題協議会」は首相官邸や在日米大使館等を訪問。日米地位協定の抜本的な見直しを要請。
●11月25日 米軍嘉手納基地を運用する空軍第18航空団、KC135の空中給油機訓練を公開。安全性をアピールする狙い。
●11月25日 米軍嘉手納基地で、米空軍の大型輸送機C17グローブマスターが緊急着陸。右主脚のパネルが開いたまま飛行。
●11月26日 沖縄県、埋め立て承認の撤回を取り消した国土交通大臣の採決の違法性を訴えた裁判が開始。
●11月29日 防衛省、名護市辺野古移設に

関する軟弱地盤改良工事についての「技術検討会」の第2回会合を開く。「液化化はしない」という防衛省の判断に、専門家は「妥当」と評価。
●11月29日 沖縄環境部、年度内に県外の埋め立て土砂採取地の外来生物調査に着手。調査は2015年度以来で2度目。来年3月まで。
●12月2日 米軍嘉手納基地と普天間飛行場の周辺住民、国に対し騒音被害を訴え那覇地裁に集団提訴したことが分かった。
●12月2日 米誌WSJ、米軍と契約する日本の請負業者が、海軍艦船から出る排水処理を不法投棄した疑いで米政府当局が調査中と報道。
●12月3日 沖縄防衛局が名護市安和の桟橋から埋め立て土砂を搬出して1年が経過。
●12月3日 陸自、饗庭野(滋賀)、国分台(香川)演習場での米海兵隊との共同訓練に普天間基地所属のオスプレイが2機参加。オスプレイ訓練の沖縄以外での実施は8回目。
●12月5日 金武町伊芸の田んぼで、パラシュートがついた円筒形の物体発見。訓練中に使った照明弾と特定。
●12月5日 辺野古沖、大しけに備えたフロートの撤去が確認された。抗議中の市民によると、台風接近時以外での撤去は珍しいとのこと。

今号の略語

DPRK=朝鮮民主主義人民共和国
EEZ=排他的経済水域
GSOMIA=軍事情報保護協定
ICBM=大陸間弾道ミサイル
KCNA=朝鮮中央通信社
MD=ミサイル防衛システム
NATO=北大西洋条約機構
NPDI=軍縮・不拡散イニシアティブ
NPT=核不拡散条約
TPNW=核兵器禁止条約

核兵器廃絶のための新しい情報を得るオープンな場
アボリション・ジャパン・メーリングリストに参加を

登録には abolition-japan+subscribe@googlegroups.com に空メールを送ってください。



非核化合意履行・監視プロジェクト

最新号「監視報告No.17」(12月6日)「日本も世界も朝鮮半島で始まった平和への歴史的チャンス逃してはならない」

ブログ: <https://nonukes-northeast-asia-peacedepot.blogspot.com/>
メルマガ購読希望の方は、office@peacedepot.org まで

「北東アジア非核兵器地帯へ: 朝鮮半島非核化合意の公正な履行に関する市民の監視活動」

編集委員

梅林宏道<umebayashihm@nifty.com>
湯浅一郎<pd-yuasa@jcom.home.ne.jp>
平井夏苗<hira@peacedepot.org>
森山拓也<moriyama@peacedepot.org>
山中悦子<e_yamanaka@nifty.com>

次の人たちがこの号の発行に参加・協力しました。

梅林宏道、清水春乃、田巻一彦、
永井剛志、中村桃子、原三枝子、
平井夏苗、森山拓也、山中悦子、
湯浅一郎(50音順)